

第4章 地域の子ども・若者が参画する 「歩くプログラム」作りの視点

1 子ども・若者の地域活動参画の視点

1960～70年頃には、子ども・若者が中心的な役割を担う地域活動が広く行われていました。活動に参加する地域の子ども・若者はその中で役割をもらい、時には失敗し、励まされて成長していきました。特に年長者はリーダーシップを発揮し、その体験を通して大人になるための準備をしていったのです。

この関係が急速に失われ続けている昨今、その原因が急速かつ様々な環境変化、地域での暮らしの変化に起因していることは疑いようのない事だと思えます。そうであるとすれば、過去の生活の知恵に学びつつも、そこに止まることなく、地域で子ども・若者が育つための支援の方法を工夫していかなければなりません。

本冊子では、「地域を知り地域を楽しむ歩くプログラム」作りに地域の子ども・若者が参画するプロセスを利用し、日常生活の中で、子ども・若者が身近な大人と力を合わせて協働する関係を生み出すきっかけとなり得ると考えています。

2 子ども・若者と大人の関係について

本冊子のねらいに沿って、「歩くプログラム」作りをきっかけにどのような相互の関係作りが可能か、基本的な考えを提案します。

(1) 環境整備と支援する機会の提供

まず大切なことは、子ども・若者が、すでに出来上がった「歩くプログラム」に参加するのではなく、プログラム作成段階から関わり、お互いの意見を交換し、失敗や修正を重ねつつプログラムの完成度を上げ、参加者に提供できるプログラムを作り上げることです。その失敗を重ねながら学ぶプロセスは貴重な経験です。大人は、その活動の機会を提供するとともに、彼らを支援する環境や条件を整える事を考えてはどうでしょう。

(2) プログラム作成・実施段階での関わり ～居場所づくりの視点～

はじめのプログラム作成にあたるグループの環境としてまず考えられることは、お互いの考えを自由に交換できる環境、雰囲気をつくれることが大切です。些細なことでも意見を出し合い、話し合える空間はお互いにとって居心地良い場所（居場所）となり、事前の計画から始まり、活

動が終わった後のふりかえり・評価までの過程を子ども・若者が主体的に担うことで、仲間とともにさらに次への活動に取り組む自信となることでしょう。そこが、「子ども・若者の参画のねらい」となります。

その際、われわれ大人にできる最低限のことは「余計なお節介を焼かない」ことではないでしょうか。自分の常識や考えを彼らに押しつけることをせず、ゆったりと構え、必要とされた時に経験や知恵を出し協力する姿勢が大事です。

(3) 大人にできること

① 大人の自己満足に陥らない

形ばかりの「お飾り参画」にしてはいけません。

② 担当分野を率直に示す

子ども・若者に力を発揮してもらいたい分野（例：実際に歩く範囲やコース設定、チラシ作り、当日の準備や後片付け 等）と、大人が引き受ける分野（例：必要物品購入や予算執行、事業広報 保険関係等）は、はじめの段階で率直に示す必要があります。

③ 地域の将来について話し合う機会を持つ

計画が無事終了した段階で、地域を歩く事で「知ったこと」「楽しめたこと」をお互いに話し合い「ふりかえりの時間」を持つことは大切です。それをきっかけに、自分たちの住んでいる地域に目を向け、将来の地域の姿を話し合い、子ども・若者が近い将来、自分の生活する地域について意識を持って進む方向を考える良い機会となるでしょう。さらには、今の仲間とともに、さらに新しい仲間を地域で増やし自らが担う活動の範囲を広げてもらいたいと考えています。



3 終わりに

この第4章では、「歩くプログラム」を地域で作って、参加者を募って実施することをきっかけに、子ども・若者の参画について考えてみました。

その中で、地域で特別な事業を大げさに実施すると言うよりは、身近な場所を使い、規模は小さくても「ねらい」に沿った活動を子ども・若者を巻き込んで行うことが大切だと思います。その積み重ねにより、日常生活の中で子ども・若者が地域の大人と力を合わせ、ともに協力し合える関係が作り上げられる事ができると考えています。

大人は大人で、様々な立場の人が地域で繋がり、協力しながら「出来る人が、自分の出来ることをやる」方法を工夫し、地域の子どもの参画を考えていく必要があるでしょう。